

口語詩句 2024.3 月 総評 龍 秀美

<総評>

「踊り場」「前職」「踏切」など物を表す言葉や、「善悪」「擬人法」「外延」などの概念を表す言葉が口語詩句でどう扱われて変身するかに興味をもって選んでみた。

踊り場で真ん中に置く散文詩

まちりこ 埼玉県

——踊り場の持つ機能として、方向転換や小休止の意味があるとのこと。ふっと寛ぐ場とも。韻文と散文の間にあるような、どちらをも向く可能性もある散文詩の形容として面白い。

前職のクセで背びれが動いちゃう

松下 誠一 東京都

——職業によって多く使う身体の部分があり、使いすぎて不調が出た場合を職業病という。さて、背びれを使う職業とは？ この作者独特のユーモア。

長文で気持ちの悪い観覧車

駒鳥朋名 東京都

——クドクドクド メンメンメンとゆっくり回る観覧車。最近のなんでも簡略化する社会に慣れると気分が悪くなる。「長文ハラメント」か。

その踏切は

一度も閉まっていないから

どの出来事にも自信があった

からすまあ 神奈川県

——閉まらない踏切とは果たして踏切か。どのできごとにも自信があり、自信が無いだろう。官僚的答弁。

小鹿の尾は白く

草の芽は短く

善悪は

便宜上の意味しか持たない

山本 欠伸 兵庫県

——多様化、多様性が叫ばれる現代に「善」と「悪」は境界が見えにくい。人間はそれに甘えているかも知れない。自然の普遍性と対比させた作品。

AIが

主語をぶんどる瞬間を

法律として在る擬人法

大嶋 碧月 兵庫県

——AIがどこまで人間の「ふり」を許されるのかという微妙な問題。

元彼と元彼が殴り合う夢で

拳はにゅうめんのやわらかさ

汐見りら 東京都

——「にゅうめん」の語感の柔らかさが、どこか滑稽な夢の非現実性を際立たせている。

実は間違えてもいい

西尾日月 島根県

——「ここだけの話だが」とか「本当のことをいうと」という前置きが付きそうなところ。正解だけが求められる現代の都市伝説か。

坂道を駆け降りてゆく毛先から

歌声までを春風と呼ぶ

花野 木春 東京都

——全身全霊というが、歌声も身体に入るらしい。

暖かさ外延すれば牡丹雪

洋梨 またら 群馬県

——牡丹雪が作者にとって特別の思い出をもつものであれば、外延ではなく内包だろうが、この句はかろうじて外延に止まっており、すんでのところで甘さを免れている。

三・一一おりづる瓶に詰められて

加那屋こあ 東京都

——時間の経過と共に次第に硬直化していく事実を「おりづる」という願いと「瓶」が隔てる外部世界として表現している。

春の月金網に傘引っかかる

奥井 健太 滋賀県

——春の月の朦朧とした非現実性と、金網に引っかかって取れなくなった傘のみじめな現実との対比が面白い。

目覚めてもまだ風船は天井に

奥井 健太 滋賀県

——胡蝶の夢、一炊の夢など、覚醒と睡眠状態との区別がつかないという寓話を人間は昔からたくさん持っている。それなのに厳として天井でフラフラしている風船。なにか可笑しい。